国宝・法隆寺展　太子の願い　太子への思い

9月3日から札幌・道立近代美術館　本紙創刊80周年

国宝　聖徳太子および侍者像のうち聖徳太子像　木造、彩色、截金　像高84・3㌢　平安時代　1121年（保安2年）　奈良・法隆寺蔵　画像提供：奈良国立博物館（撮影・西川夏永）

一　教え　厳かに

太子像　菩薩の姿重ねて

日本初の成文法とされる憲法十七条や、朝廷の人材登用制度・冠位十二階などの制定、大陸との関係を結ぶための遣隋使派遣…。卓抜した手腕で推古天皇を補佐し、国造りを進めた厩戸王は没後、聖徳太子として歴史に名を残す偉人となった。仏教振興に尽力し、建立した寺院のひとつが法隆寺（奈良県斑鳩町）。世界最古の木造建築物として1993年、日本最初の世界文化遺産に指定された。

広大な境内のやや西寄りに太子の霊廟、聖霊院がある。そこに祀られている国宝の「聖徳太子像」は、太子の御遠忌（亡くなってからの年）500年目にあたる平安時代の1121年（保安2年）に作られた。きりりとしたまなざしで笏を持ち、ほんの少し口を開いて語りかける姿は日本史の教科書や、かつての1万円札でよく知られる肖像画と比べ、厳しさが感じられる。

「同じ目の高さで向き合われると、そうした印象を受けられるかもしれません。聖霊院の内陣ではやや高い位置に祀られており、見上げて拝むとほほ笑んでおられるようにも感じます」と法隆寺の古谷正覚管長（73）は話す。

この太子像の内部には、お経や観音菩薩像が収められている。菩薩像の顔は、ちょうど太子像の口元に当たる高さに設置されている。奈良国立博物館の三田覚之主任研究員（40）は「人間であり観音菩薩の化身でもある太子様が、経典をお説きになっている姿を表しています」と説明する。瞳にはガラス板がはめこまれ、まぶたにはかつて、まつげを表現する糸を植え込んだとみられる小さな針穴の跡も。「生きているかのような表情の再現が意識され『太子様によみがえっていただきたい』という作り手の熱意が感じられます」

聖霊院内陣の扉が開かれるのは、太子のご命日法要が行われる3月22日など1年間のうちわずか。そのため太子像は表面の彩色が今も残るなど、保存状態が良い。その太子像が昨年、東京と奈良で開かれた特別展「聖徳太子と法隆寺」に続いて御遠忌1400年の今年9月3日、札幌・道立近代美術館で開幕する「国宝・法隆寺展」へ〝お出まし〟になる。

「いわば北海道へ、太子様そのものがいらっしゃるわけです」。同展の総監修を務める大阪市立美術館の内藤栄館長（61）は、この貴重な機会をそう語る。

文・渡部淳
写真・打田達也

＝2面に続く

4回連載します

時代区分	年	出来事
飛鳥時代	574	厩戸王（後の聖徳太子）生誕
	586	厩戸王の父、用明天皇が法隆寺や薬師如来坐像の造立を発願
	587	用明天皇崩御
	592	推古天皇即位
	593	厩戸王が皇太子となる
	594	推古天皇が「仏法興隆の詔」を発する
	603	「冠位十二階」制定
	604	「憲法十七条」制定
	607	法隆寺建立。2回目の遣隋使として小野妹子ら派遣
	622	厩戸王没
白鳳時代	670	法隆寺、落雷による火災で焼失
奈良時代	7世紀末～8世紀初頭	法隆寺が再建される
平安時代	1121	「聖徳太子および侍者像」が作られ、聖霊院が建立される

国宝・法隆寺展

◇**会期**　9月3日㈰～10月30日㈰午前9時半～午後5時（入場は4時半まで）。9月20日㈫と10月11日㈫、月曜休館（9月19日、10月10日を除く）

◇**会場**　道立近代美術館（札幌市中央区北1西17　電話011・644・6882）

◇**観覧料**　一般1800円（1600円）、高大生千円（800円）、中学生700円（500円）。かっこ内は前売りと10人以上の団体などの料金。小学生以下無料（要保護者同伴）。前売り券は札幌・道新プレイガイドなどで販売中

◇**主催**　法隆寺、道立近代美術館、北海道新聞社、テレビ北海道、日本経済新聞社

日曜 navi ナビ

国宝・法隆寺展

太子の願い　太子への思い

救済求める信仰の場に

法隆寺の境内は18万7千平方㍍、札幌ドームの建物3個超と広大。全国各地から参拝者や修学旅行生、観光客が引きも切らない。「奈良時代の鐘が今も使われてるんだって。法隆寺ヤバい」。長い歴史に感嘆する話し声が聞こえてくる。

594年、厩戸王に政務を支えられた推古天皇は「仏教を盛んにする」として「仏法興隆の詔」を発した。この「法」と「隆」の文字をいただいたのが法隆寺。607年に建立され、670年に落雷による火災で焼失したが、のちに再建された。

仏教伝来から間もないころ、寺は天皇家や力のある豪族が、家族の健康や家系の繁栄を願う場として建てられた。法隆寺も、厩戸王の父である用明天皇が病気になり、自ら治癒を祈るための薬師如来坐像を祀る場として建立を発願したもの。完成前に用明天皇は崩御したが、遺志を厩戸王が受け継いだ。古谷管長は「親への感謝が込められた寺であったわけです」と解説する。

やがて全国各地の寺は、建立した主のためだけでなく、民衆の信仰を集める場となっていく。法隆寺も「ゆかりの太子様を参拝する場」として広く知られていった。親鸞聖人は太子を日本で仏教を広めた偉人として「和国の教主聖徳皇」、つまり日本の仏法の主であるとたたえた。太子の徳の高さは、宗派を超えて信仰の対象となっていった。

「太子様は、苦しんでいる方々に救いの手をさしのべる『救世観音』の化身である、とする教えがあります。拝むことで救われる、と人々の間に広がっていきました」と古谷管長。また、大野正法執事長(70)は、寺周辺の斑鳩の地にある「ため池」が、民衆の農作業に役立ったことも太子信仰につながっていると話す。

「太子様の池のおかげで米を作れるようになりました、と、今もお米をご寄進いただいている農家の方がいらっしゃいます」

法隆寺は、時代の節目節目で仏像などの収蔵物やそれにまつわる伝承などを「資材帳」という目録に記録してきた。奈良国立博物館の三田主任研究員は「現代の博物館が文化財保護として行っていることに、1400年前から取り組んでいる。太子様ゆかりの寺や仏像などを守って伝えたいという思いが、中核にあるからでしょう」と解説する。

また、戦国時代などを経ても焼き打ちなどに遭うことなく、その時々の権力者などから支援を得て定期的に大修理を施してきた。1605年(慶長10年)には豊臣秀頼が伽藍(寺の建物)全てを修理した。仏像などを境内の外で公開し、広く寄進を募る「出開帳」も1694年(元禄7年)や1842年(天保13年)に江戸で開催。今の「特別展」に通じる取り組みといえる。今年6月、さまざまな維持管理費をクラウドファンディングで募ったところ、予想を超えて1億5千万円を超す支援が寄せられたのも記憶に新しい。

「太子様のお寺」ならではのありがたい仏像などを有している〝強み〟も生かされたことだろう。「国宝・法隆寺展」で札幌へお出ましになる国宝の「夢違観音」もそのひとつ。優しくほほ笑むこの像に祈れば、悪い夢もよい夢にかわるという言い伝えがある。

古谷管長は、今回の「国宝・法隆寺展」を「太子様の教えを、多くの方々が知る機会に」と願っている。

「観光という言葉は、旅行で物見遊山することを指しますが、本来は『光を観る、光を感じる』ことだと思います。仏様と対面されたとき、仏様が出しておられる〝オーラ〟や光を感じてください」。大野執事長も「仏様のお顔を見て、心で対話してください。自分は何を感じたのか、と。心の様子が仏様の表情に、鏡のように反映されると思います」と話す。

法隆寺境内の西側に建つ五重塔と、本尊を祀る金堂。修学旅行生らが全国各地から訪れる

国宝　観音菩薩立像（夢違観音）　銅造、鍍金　像高87㌢　飛鳥時代（7～8世紀）　奈良・法隆寺蔵　画像提供：奈良国立博物館

㊧法隆寺の古谷正覚管長（左）と大野正法執事長
㊨法隆寺の聖霊院外陣。聖徳太子像が祀られているのはこの奥の内陣で、扉が開けられる機会は限られている

国宝　菩薩半跏思惟像（伝如意輪観音）　木造彩色　総高167・8㌢（光背含まず）、像高133・0㌢、坐高87・9㌢　飛鳥時代（7世紀）　奈良・中宮寺蔵（撮影・三好和義）

二　笑み　優しく

悩みを聞き救う菩薩像

右脚を組んで左膝の上にかけ、右手の指を軽く曲げて頬に寄せている。ものを思う顔は、静かな笑みをたたえている。奈良県斑鳩町、法隆寺境内の東側に隣接する中宮寺は、日本最古の尼寺。その本尊が、国宝の「菩薩半跏思惟像」だ。明治時代、日本美術を研究した米国人フェノロサが「東亜美術史綱」に「現神の燦然として出現せるが如し」と記すなど、その美しさは広く知られている。

「半跏」とは、片足を組んだ座り方。指を頬に寄せる姿を合わせた「半跏思惟像」の仏像は古代のインド、中国、朝鮮半島で広く見られる。日本では飛鳥から奈良時代までに作られたものが大半。本尊はその代表といえる。

作られた正確な年や造立の経緯は、よく分かっていない。中宮寺では「如意輪観音」の名で「太子様（聖徳太子）が、母である穴穂部間人皇后のお姿をお刻みになられたもの」と伝えられている。

よく見ると左足は台からわずかに浮き、指先が上を向いている。「悩みを聞き届け、すぐにお救いにいらっしゃるお姿です、と私はよく話しております」と日野西光尊門跡(92)に教えられた。中宮寺では代々、皇族や公家、華族の女性が住職にあたる「門跡」を務めてきた。「朝は『きょうも一日、お守りくださいませ』、夕方には『きょう一日、お守りいただきまして、ありがとうございました』と拝んでおります。こちらの心が喜びに満ちていれば、にこにこしていらっしゃいますし、悩みを抱えていると『そんなことを考えてはいけません』と、こちらの心を映すように語りかけてこられます」

本尊を「慈悲や慈愛が高い完成度で表現されている」と語るのは、奈良国立博物館の三田覚之主任研究員(40)。「はっきりしたまぶたの切り込みを入れず、目を段差として表現しているところに、柔らかい印象の秘密があるのでは」。また、上半身は筋肉の付き方などが写実的なのに対し、下半身は抽象的な造形で、その融合を「柔らかなリズム」と表現する。「正面からだけでなく、三次元的に全体が把握されている。自然でなめらかな体の表現が成し遂げられています」

9月に札幌で開幕する「国宝・法隆寺展」は、初めて道内で本尊を参拝できる機会だ。「ゆっくり対面されると、何か心の中にお持ちの方に、きっと答えを出してくださるでしょう」と、日野西門跡は話す。

文・渡部淳
写真・打田達也

＝2面に続く

時代区分	年	出来事
飛鳥時代	6世紀末～7世紀前半	中宮寺創建
	7世紀	菩薩半跏思惟像の造立
	622	聖徳太子没。天寿国繍帳が作られる
鎌倉時代	1274	中宮寺の信如比丘尼が法隆寺の蔵で天寿国繍帳を発見
	1275	天寿国繍帳の模本が作られる
江戸時代	1772～1781	天寿国繍帳の原本と模本から、状態が良い部分が縫い合わせられる

国宝・法隆寺展

◇**会期**　9月3日㊏～10月30日㊐午前9時半～午後5時（入場は4時半まで）。9月20日㊋と10月11日㊋、月曜休館（9月19日、10月10日を除く）

◇**会場**　道立近代美術館（札幌市中央区北1西17　電話011・644・6882）

◇**観覧料**　一般1800円（1600円）、高大生千円（800円）、中学生700円（500円）。かっこ内は前売りと10人以上の団体などの料金。小学生以下無料（要保護者同伴）。前売り券は札幌・道新プレイガイドなどで販売中

◇**主催**　法隆寺、道立近代美術館、北海道新聞社、テレビ北海道、日本経済新聞社

国宝・法隆寺展

太子の願い　太子への思い

国宝　天寿国繍帳　絹製、刺繍　縦88・8㌢×横82・8㌢　飛鳥時代　62年（推古天皇30年）ごろ　奈良・中宮寺蔵（画像提供：奈良国立博物館）

1968年に建てられた中宮寺の現在の本堂。周囲にヤマブキが植えられている ▼

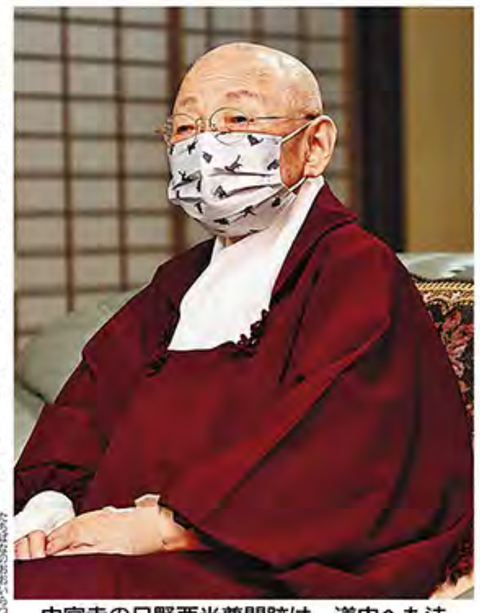
太子悼む最古の刺しゅう

中宮寺が誰によって、いつ建立されたのか、過去の記録では諸説ある。

聖徳太子の母である穴穂部間人皇后が発願したとする説、聖徳太子が創建した説など。時期は6世紀末から7世紀前半にかけてとみられ、当初は現在地よりも約400㍍東側にあった。火災などの苦難にも遭いながら再建され、いまの地にある。

「国宝・法隆寺展」で中宮寺ゆかりの宝物では、国宝の「天寿国繍帳」も出展される。太子の死を悲しんだ后の橘大郎女が、太子が往生した世界を見たいと望み、推古天皇に頼んで采女（宮中の女官）に作らせた刺しゅうだ。ウサギのいる月や亀、人などが薄い下地の絹の上に刺しゅうされ、刺しゅうはアップリケ状に姿が浮き上がっている。

法隆寺の蔵に長くしまわれていたものを、中宮寺の尼僧、信如比丘尼が1274年（文永11年）に発見。翌1275年に模本が作られたが、どちらも長い年月を経て細かい断片となった。残ったものが江戸時代の安政年間に貼り合わせられて一体となり、中宮寺に収蔵された。全体は大きく六つの区画に分けて貼られている。



中宮寺の日野西光尊門跡は、道内へも法要で知床などを度々訪れており、今年4月の遊覧船事故に心を痛められていた

現存する日本最古の刺しゅうであり、染織作品。今回の出展物の中で最も古い。特別展の総監修を務める、大阪市立美術館の内藤栄館長(61)は「上段左側の部分には月や鳳凰など、空にあるものが集められている。下段右側の部分には鐘をつく僧の姿や、巡礼者風の男女が見えます。断片化した図柄を、当初の位置関係に近づけて貼ったようです」と解説する。

実は、意外にも衣装などの色が鮮やかなのが古い飛鳥時代の原本で、鎌倉時代の模本は色あせて黄色っぽくなっている。「飛鳥時代は使う絹糸の繊維を何十本も撚り合わせ、染めの技術も高く、縫い目も細かかった。一方で鎌倉時代はまったく撚り合わせず、縫い目が粗い。ただしその方が、絹糸の光沢はきれいでした。染め方や撚り方、縫い方の違いが、時を経て保存状態の差に表れています」と内藤館長。繍帳は奈良国立博物館へ寄託され、中宮寺では1982年に作られた複製が飾られている。

中宮寺の表御殿にある「御上段の間」。格式の高さが伝わる

中宮寺の日野西光尊門跡は旧華族出身で、幼稚園教諭を経て61年に入寺。90歳を超えてからも宮城県名取市での東日本大震災法要に臨むなど、祈りをささげ続けてきた。中宮寺と聖徳太子のゆかりに触れ「太子様が常におおせになられていた」という「世間虚仮　唯仏是真」の言葉を説く。

「この世は瞬間、瞬間に変化して、今を押さえてもすぐ過去になる。虚であり仮である世の中で、仏だけが真であると」。ただし「仏」とは仏像を指すのではない。「太子様は『みんなが仏様なのです』とおっしゃっている。生まれてすぐのけがれがない状態が、年を取ると『我』に執着してがんじがらめになる。我があるから腹が立つし、けんかもします。我を取り除けたら、みなさん仏になれます。仏探しをしましょう、と太子様はおっしゃっている。仏様が真実で、あなたが仏様なのです」

コロナ禍が広がる前は、夏に「尼僧体験研修」や女子児童向けの「女児一休さん」と称した心身修練会を催してきた。「太子様の教えを広めて、和やかな心で帰っていただく場でありたいと思っております」

中宮寺と皇室のゆかりを伝える部屋を、特別に見ることができた。今でも宮家の方々が訪れる際に使われる、表御殿の「御上段の間」だ。壁やふすまに描かれた、花や鳥が舞う絵が美しい。江戸時代（18世紀ごろ）の作で、修復作業を経て今も鮮やかだ。

国宝　天人（金堂天蓋付属）琵琶　木造、彩色　高さ53・7㌢　飛鳥時代（7世紀）　奈良・法隆寺蔵（画像提供：奈良国立博物館）

三　徳を称えて

真善美の天蓋　仏様のため

聖徳太子が607年に建立した、奈良県斑鳩町の法隆寺。670年に落雷による火災で焼失するが、7世紀末から8世紀初頭にかけて再建された。再建された境内の金堂には釈迦三尊像、薬師如来像、阿弥陀三尊像が安置され、それぞれの本尊の上に四角い箱形の天蓋がつり下げられている。

天蓋はヒノキで作られている。その下部には木製の球を網状につなげたものが下げられ、上部には琴や竪笛を奏でる天人や、鳳凰の木彫りが飾られている。古代の仏教美術では、仏が座す天上界を表現する場面に天人や鳳凰がよく描かれてきた。

9月に札幌で開幕する「国宝・法隆寺展」に出展される「天人（金堂天蓋付属）琵琶」も、その飾りのひとつ。天人の頭から、座っている蓮華座までを一体としてクスノキを彫り、手先や楽器の一部は別に作ってある。背負っている装飾は板を透かし彫りしたもの。表情が何とも素朴で愛らしい。

ただ、金堂の中を限られた場所からのぞき見る現在の見学方式では、本尊の上にある天蓋は見えにくい。たとえ金堂の中に入れても中は暗いため、天井に近い天蓋に目を凝らしても、ついている飾りに気付きにくいはずだ。

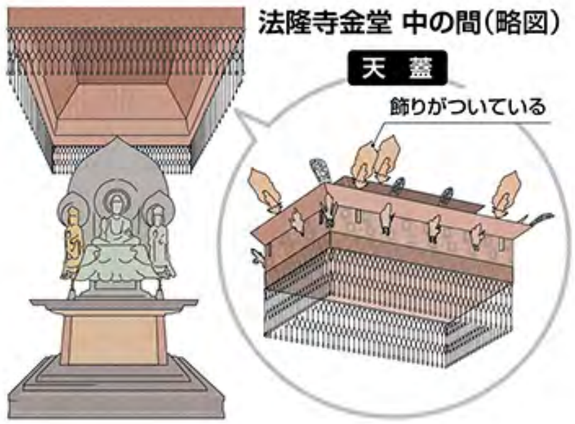
この「見えにくいところまで装飾されている」点を、奈良国立博物館の三田覚之主任研究員(40)は「人間のためではなく、仏様のためだからでしょう」と解説する。「仏様にささげるため、作り手が『真善美』（理想を実現した最高の状態の意味）を尽くした。その表れだと思います」

金堂は世界最古の木造建築物。中に祀られた仏像や飾られたものもまた、飛鳥時代（7世紀）にさかのぼるものが多い。夏は蒸し暑く冬は底冷えするような厳しい日本の気候のもと、現代までよく保存されてきたと感嘆する。特別展で総監修を務める大阪市立美術館の内藤栄館長(61)は「日本美術で古いものほとんどは、仏教美術に関するものです。お寺では千年単位のものが平気で残っている。何よりお寺の方々や信者たちの努力のたまものです。千年以上前の文化財が、発掘品でなく地上に残されているのは、世界的にも奇跡です」と話す。

本尊の頭上を飾るこの天蓋は2020年、文化審議会から文科相への答申を経て、国宝に指定された。日本最古の天蓋としての価値が、あらためて評価された。

文・渡部淳
写真・打田達也
＝2面に続く

法隆寺金堂 中の間（略図）



国宝・法隆寺展

◇会期　9月3日(土)～10月30日(日)午前9時半～午後5時（入場は4時半まで）。9月20日(火)と10月11日(火)、月曜休館（9月19日、10月10日を除く）

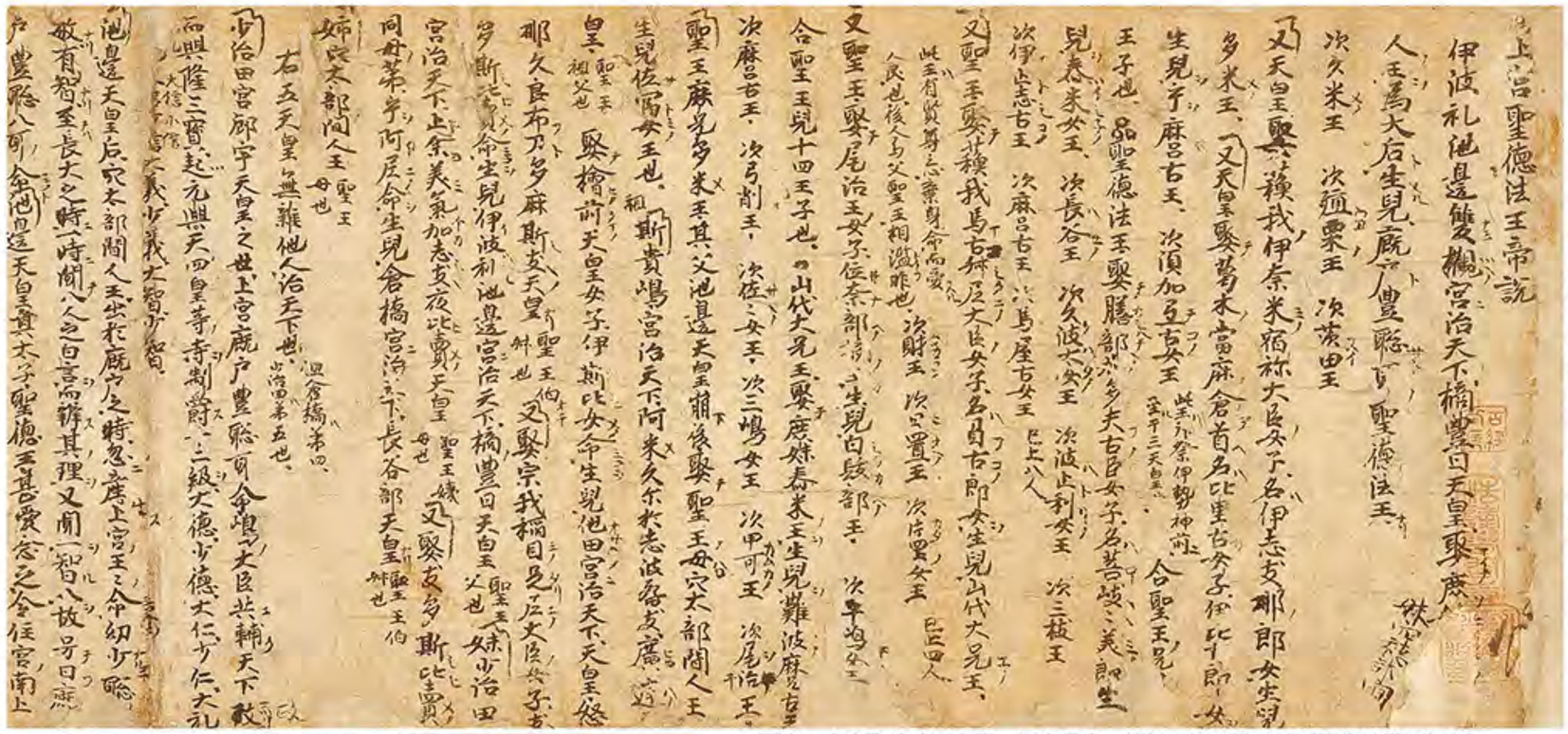
◇会場　道立近代美術館（札幌市中央区北1西17　電話011・644・6882）

◇観覧料　一般1800円（1600円）、高大生千円（800円）、中学生700円（500円）。かっこ内は前売りと10人以上の団体などの料金。小学生以下無料（要保護者同伴）。前売り券は札幌・道新プレイガイドなどで販売中

◇主催　法隆寺、道立近代美術館、北海道新聞社、テレビ北海道、日本経済新聞社

国宝・法隆寺展

太子の願い　太子への思い

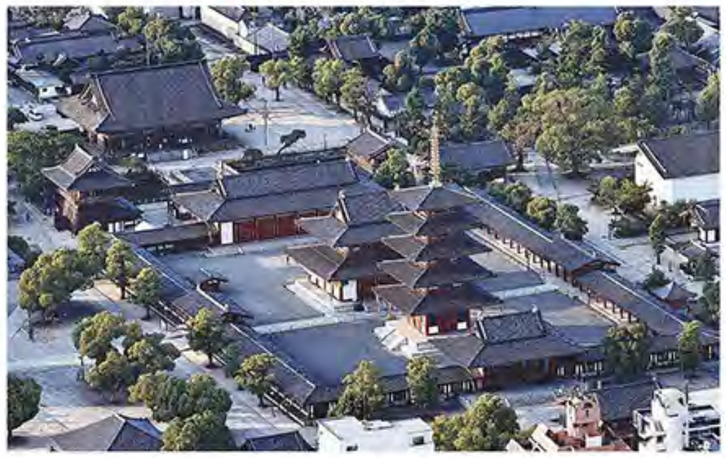


国宝　上宮聖徳法王帝説　紙本墨書　縦26.7㌢×横229㌢（写真は巻頭部分）
平安時代（10～11世紀）　京都・知恩院蔵（画像提供：奈良国立博物館）

▲四天王寺境内の「番匠堂」

◀四天王寺の渡辺慶一郎学芸員

高層ビル「あべのハルカス」展望台から撮影した四天王寺。南（手前下）から北に向かって中門、塔、金堂、講堂が一直線上に並ぶ▼



仏寺建立 百済の技術

国宝の「上宮聖徳法王帝説」は、聖徳太子の生涯の功績や、系譜などを平安時代にまとめた伝記。「国宝・法隆寺展」にも出展される。この中に、百済の聖明王が538年に仏像や経典を初めて日本へ伝えたとする記述がある。

この6世紀中ごろ、朝鮮半島で高句麗、新羅の2国と争っていた百済が、日本に支援を要請。ときの欽明天皇（在位539年？～571年？）が兵士や武器を送ったのに対し、百済は見返りに医師や易者などの学者、薬など当時の先進的技術の産物を送った。この中に、仏像や経典も含まれていたとされる。

その後、6世紀末に日本で最初の大規模寺院、飛鳥寺（奈良県明日香村）が有力な豪族の蘇我馬子によって建てられ、607年に聖徳太子が法隆寺を建立する。大阪市立美術館の内藤栄館長は「飛鳥寺が建立される直前、百済から日本へ僧侶や、『瓦博士』や『鑪盤（仏塔の金属でできた装飾部分）博士』など土木建築の専門家が来た、という記録がある。飛鳥寺も法隆寺も、百済人の技術で建てられたと言ってよいでしょう。日本の産業革命とも呼ぶべき、技術や文化が飛躍的に発展する時期を迎えることになります」と言う。

大阪市立美術館の内藤栄館長。「国宝・法隆寺展」の総監修を務める

奈良国立博物館の三田覚之主任研究員

聖徳太子はまた、611年から615年までの間に仏教の経典の注釈書「三経義疏」を著したとされる。奈良国立博物館の三田覚之研究員は「飛鳥寺の塔跡から見つかった埋納品はよろいや勾玉など、それまでの古墳に収められていたものと共通性があり、仏教色が行き渡っていません。古来の土着の信仰とミックスされていた感がある」と話す。「そこから約20年の間に、太子は『三経義疏』などに関わった。仏教への理解が非常に速く、その哲学を高いレベルで著している。法隆寺建立のスピード感などと、密接な関係があると思います」

聖徳太子は百済から名工を招き、高度な建築技術を取り入れた。そのため「大工技術の始祖」としても崇拝されている。

それがよく分かるのが、大阪市天王寺区にある四天王寺だ。法隆寺などと並んで太子が建立した寺のひとつで、境内に「番匠堂」というお堂がある。寺などを建てた宮大工（番匠）を顕彰する場だ。寺で授与する御札を、作業の安全と無事完成を願って貼る工事現場が今も少なくないという。

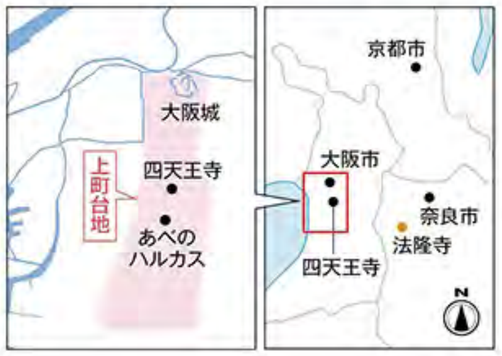
時代区分	年	出来事
飛鳥時代	538	日本に仏教伝来（「上宮聖徳法王帝説」の記述による）
	587	衣摺の戦い（「丁未の乱」とも呼ぶ）で蘇我氏が物部氏を破る
	6世紀末～7世紀初頭	飛鳥寺、四天王寺、法隆寺が建立される
	611～615年	聖徳太子が「三経義疏」を著す
平安時代	10～11世紀	「上宮聖徳法王帝説」が著される

四天王寺の建立は、伝来した仏教の受け入れに賛成した蘇我氏と、反対した物部氏の「衣摺の戦い」（587年、丁未の乱とも呼ぶ）に由来する。当時14歳だった太子が蘇我氏の勝利を願ってヌルデの木で「四天王像」を彫り、勝てば像を祀る寺を建てると発願。戦いは蘇我氏が勝ち、太子が593年に建立した、と「日本書紀」に記されている。

四天王寺は、大阪市内で南北12㌔に及ぶ標高10～25㍍の上町台地に建つ。寺の伽藍（建物）が南から北へ、中門―塔―金堂―講堂と並ぶのが特色だ。同寺の渡辺慶一郎学芸員(32)は「建立当時、今よりも海岸線が台地に近く、寺のすぐ西側が海でした。朝鮮半島の使者などが船で大阪湾へ近づいた時、伽藍が横に長く、立派に見える視覚的効果を狙った配置と思われます」と説明する。

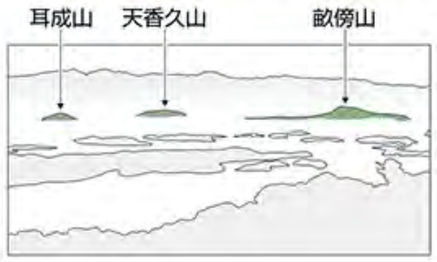
仏教を通じ、民衆を救済する太子の願いを反映した「四箇院」の存在が、寺に残る国宝の文書「四天王寺縁起」（1007年）などで伝わっている。仏教教育の「敬田」、老人や孤児を救う「悲田」、医療施設の「施薬」「療病」の四つの院が境内の内外にあったという。また、「四天王寺は極楽浄土の東門にあたる」として浄土信仰の聖地となり、西方に沈む夕日を拝む「日想観」が行われた。

四天王寺は天災や戦災で何度も焼失しながら、再建を重ねてきた。「江戸時代後期からは主に民間や、寺自身の手で復興してきました」と渡辺学芸員。太子信仰の重要拠点という背景も、後押しとなっただろう。



訂正　14日の「国宝・法隆寺展」の記事で「世間虚仮　唯物是真」とあるのは「世間虚仮　唯仏是真」の誤りでした。訂正します。

奈良県王寺町の明神山から南東方向を望む。奈良盆地に耳成山、天香久山、畝傍山と低い山が点在する



四　今も慕われ

大和三山 いにしえを思う

春過ぎて夏来たるらし白妙のころもほしたり天の香具山

万葉集に収録された、持統天皇（在位690～697年）の和歌。「夏が来たらしい。香具山のほうに、白い衣が干されているのが見える」の意で、夏の日差しを感じさせ、すがすがしい。百人一首では「春過ぎて夏来にけらし白妙の衣ほすてふ天の香具山」とされ、こちらがなじみ深い人も多いだろう。

9月に札幌で開幕する「国宝・法隆寺展」に向けて、ゆかりの寺などを訪ねてきた。スタートは、大阪府と接する奈良県北西部の王寺町。標高273㍍の明神山山頂に、360度を見渡せる展望台がある。南東方向を望むと、和歌に登場した天香久山（国土地理院の表記、152㍍）や、耳成山（139㍍）、畝傍山（199㍍）の「大和三山」と呼ばれる低い山々が奈良盆地に点在しているのが見える。道内ではあまり見かけない眺めで、これが「大和の国」と称される日本の原風景なのか、と想像した。

取材でこの地を巡る中で、日本史の授業などで知った有名な寺について、地元の人たちも誇りを抱きながら親しんでいると実感した。また、この地で聖徳太子が「太子さま」「お太子さん」と敬愛を込めて呼ばれているのは、飛鳥時代から今に至る歴史が身近なものとしてあるからだと思う。その重みをかみしめた。

奈良県内を車で走れば、さらに道内との違いをひしひしと感じる。国道でも道幅が狭い。沿道の家屋は途切れず市街地が続くところが多い。とても道内のスピード感覚でドライブ、というわけにはいかず、30㌔先の目的地へたどり着くにも1時間をゆうに超えた。

その感覚もまた、いにしえの時代に思いをはせる一助となった。時がゆっくりと流れる中で、万葉集からもう一つ、作者不明のこの歌を。

いにしへのことは知らぬを我れ見ても久しくなりぬ天の香具山

「昔のことは知らないけれど、私が見始めてからも久しくなった。天の香具山は」の意味という。

文・渡部淳
写真・打田達也

＝2面に続く

国宝・法隆寺展

◇**会期**　9月3日㊐～10月30日㊐午前9時半～午後5時（入場は4時半まで）。9月20日㊋と10月11日㊋、月曜休館（9月19日、10月10日を除く）

◇**会場**　道立近代美術館（札幌市中央区北1西17　電話011・644・6882）

◇**観覧料**　一般1800円（1600円）、高大生千円（800円）、中学生700円（500円）。かっこ内は前売りと10人以上の団体などの料金。小学生以下無料（要保護者同伴）。前売り券は札幌・道新プレイガイドなどで販売中

◇**主催**　法隆寺、道立近代美術館、北海道新聞社、テレビ北海道、日本経済新聞社

日曜 Navi ナビ

国宝・法隆寺展

太子の願い　太子への思い

橘寺の往生院にある色鮮やかな格天井

㊤橘寺の本堂には、奈良県在住の妖怪画家・書家、逢香（おうか）さんが描いた太子の絵が奉納されている
㊦叡福寺の境内にある聖徳太子御廟の門

偉人への敬愛 次世代へ

叡福寺の宝塔を背にする近藤本龍住職

「国宝・法隆寺展」の取材を始めた奈良県王寺町は、法隆寺がある斑鳩町の西隣にある。王寺町に、太子とゆかりがある達磨寺や、太子が没後、墓所まで葬送された道「太子道」があることなどから、太子の愛犬の伝説を生かして2013年に「雪丸」というキャラクターを生み出し、公式マスコットとしている。

ここから明日香村へ。太子生誕の地とされる場所に建つ、橘寺を訪ねた。もともと欽明天皇の別宮「橘島宮」が存在し、その娘である穴穂部間人皇后が出産を間近に控え、宮中を巡っていたところ、厩（馬小屋）にさしかかった辺りで陣痛に苦しむこともなく出産した、という言い伝えがある。「その後、お宮の敷地の中心に橘寺が建てられました」と、橘寺の古賀野正空副住職（49）が教えてくれた。

境内は季節ごとにさまざまな花が咲き乱れ、それを楽しみに参拝する人も多い。「先代の住職が、お寺を身近に感じてもらえるよう、訪れるきっかけづくりに花を植え始めました」と古賀野副住職。1997年に境内に建てられた往生院の格天井も、多彩な画家に極楽浄土をイメージして描いてもらった260点の花の絵が色鮮やか。

㊨奈良県王寺町の駅前にあった、聖徳太子と愛犬・雪丸のパネル
㊧叡福寺門前のバス停にあった、交通安全を訴える〝聖徳太子風〟の看板

太子生誕のいわれがある地から、次は太子が眠る地へ。県境を越え、大阪府太子町の叡福寺を訪ねた。境内にある聖徳太子御廟には太子と、その母の穴穂部間人皇后、太子の后の一人である膳部大郎女の3人の棺が納められていると伝えられている。

なぜ、この地なのか。太子が27歳で日本全国を視察中に富士山に登ったところ、五色の光が漏れ出でる地が西方に見え、比類の無い霊地であるとしてその地を自らが眠る場所に定めた、との言い伝えがあるという。叡福寺の近藤本龍住職（58）は「敏達天皇や、太子の父である用明天皇の墓所が付近にあったことも影響しているでしょう。太子様は14歳の若さで蘇我氏と物部氏の戦争（587年、衣摺の戦い）に身を投じた。政権を担ってからも、いつ死ぬか分からない状況を考え、早くから墓所をお決めになったのではないでしょうか」と語る。

太子没後の622年、推古天皇によって御廟を守る「お堂」が設けられた。さらに奈良時代の724年、聖武天皇によって伽藍（寺の建物）が造営され、叡福寺が建立された。太子信仰の象徴的な場として、空海、親鸞、一遍、日蓮をはじめさまざまな名僧が霊廟を参拝してきた。

霊廟の中には入れないが、霊廟の門に向かって手を合わせる来訪者は多い。「お釈迦様のお骨を納めた仏舎利塔に入って拝むことで悟りに近づくことができる、という仏教の教えがあるように、偉人のお墓をお参りすることは意義があります。御廟に気持ちよくお参りしていただくため、境内では一に掃除、二に掃除を心掛けています」とほほ笑んだ。

叡福寺門前のバス停に、聖徳太子のようなひげを生やし、ランドセルを背負う看板があった。交通安全を訴えるキャラクターだろう。子どもたちが偉人に親しみを抱き、次の世代へ語り継ぐ。そうした流れが地域にあるのでは、と思えた。

＝おわり＝

参拝者が撮影してネットに投稿し、いわゆる「インスタ映え」する場所として話題になっている。

サイクリングコースの沿道にあるため、寺にはツーリング用の自転車を駐輪する柵が設けられていた。周囲には田畑が広がり、非常にのどか。「太子様を慕われる方々をはじめ、トラクターの音や鳥のさえずりを聞きながら、ゆっくりたたずんでいただける場所だと思います」